



解が一つでない時代の教育を考える

校長 新井 篤志

今年の梅雨は、台風が近づいて大雨に警戒が必要かと思えば、急に梅雨が明けたような猛暑になるなど気候の変動が激しいです。子どもも大人も熱中症対策とともに健康管理に気を付けていかねばならない日々が続いています。

6年生の赤城・日光宿泊体験学習は雨が心配されましたが、3日目の日光での活動を除いては雨の心配はなく、予定していた活動をすべて行うことができました。夜のキャンプファイヤーやレクリエーションをはじめとして、6年生のパワーのすごさを感じさせてくれた3日間でした。この学年全体としてのエネルギーを生かして、今後の学校生活を充実させてほしいと思いました。

6年生の宿泊体験学習の翌日から大分市で開催された社会科教育の研究協議会に参加しました。全国から多くの先生が集まり、授業をもとに討議を行いました。テーマは社会科学学習を通して「人に学び、自分の生き方を創りつづける子ども」を育てるです。私は5年生の社会科で日本の水産業について学習する授業を参観しました。学習の題材には大分らしく佐賀関漁港で獲れる「関あじ・関さば」を取り上げていました。「関あじ・関さば」は全国的に有名でブランド化されています。しかし、近年漁獲量や収益は減少し、漁師も少なくなっている現状を踏まえて、「関ブランドをどうすれば守り続けられるか」を問題として取り上げ、日本の水産業の将来を考えていました。子どもたちは佐賀関のさばやあじをブランド化した漁協の人の取組の様子を調べて上記の問題について考えていました。子どもたちは、様々な資料を使いながら漁師の立場、消費者の立場、環境保護の立場、販売する立場などそれぞれの立場から友達同士で意見交換しました。「環境を守れば魚が増えて漁師も増える」「でも環境は簡単には変えられない」「魚をさばくのが面倒に思う人が多いだけで魚が好きな人は多い」「イベントやキャンペーンを行えば消費者が増えて、漁師も収入が増える」「お店の人との関わりが必要だ」など。そして、話し合う中でどれもが関わり合っていて「こうすればよい」という明確な解がないことに気づいていきます。実際には「関あじ・関さば」は東京などへの出荷から県内にしぼって卸し、獲る量も調整しています。子どもたちが考えたこととは異なる事実があります。

これからの社会は今まで以上に複雑で、明確な解が見つからない時代です。それ故にいろいろな立場や視点で物事を考えて判断していく力が必要です。この力を子どもたちが身に付けられるようにするのが教育の役割とあらためて考える機会となりました。

《丸山台小学校ホームページ更新のお知らせ》

平成30年度中期学校経営方針、学力向上アクションプラン、豊かな心育成プラン、体育・健康プラン、いじめ防止、29年度決算報告、30年度予算案などを更新いたしました。